気のいい火山弾

宮沢賢治

青空文庫

ある死火山のすそ野のかしはの木のかげに、「ベゴ」といふあだ名の大きな黒い石が、永いことじいっと座ってゐました。

「ベゴ」と云ふ名は、その辺の草の中にあちこち散らばった、稜のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本たうの名前もあったのでしたが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。

ベゴ石は、稜がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのばしたやうな形でした。そして、ななめに二本の石の帯のやうなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ぺんも怒ったことがないのでした。

それですから、深い霧がこめて、空も山も向ふの野原もなんにも見えず退くつな日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をからかって遊びました。

「ベゴさん。今日は。おなかの痛いのは、なほったかい。」

「ありがたう。僕は、おなかが痛くなかったよ。」とベゴ石は、霧の中でしづかに云ひました。

「アァハハハハ。アァハハハハハ。」稜のある石は、みんな一度に笑ひました。

「ベゴさん。こんちは。ゆふべは、ふくろふがお前さんに、たうがらしを持って来てやったかい。」

「いゝや。ふくろふは、昨夜、こっちへ来なかったやうだよ。」

「アァハハハハ。アァハハハハハハ。」稜のある石は、もう大笑ひです。
「ベゴさん。今日は。昨日の夕方、霧の中で、野馬がお前さんに小便をかけたらう。気の毒だったね。」
「ありがたう。おかげで、そんな目には、あはなかったよ。」
「アァハハハハ。アァハハハハハハ。」みんな大笑ひです。
「ベゴさん。今日は。今度新らしい法律が出てね、まるいものや、まるいやうなものは、みんな卵のやうに、パチンと割ってしまふさうだよ。お前さんも早く逃げたらどうだい。」
「ありがたう。僕は、まんまる大将のお日さんと一しょに、パチンと割られるよ。」
「アァハハハハハ。アァハハハハハハ。どうも馬鹿で手がつけられない。」
丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射し、青ぞらがいっぱいにあらはれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考へはじめました。そこでベゴ石も、しづかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。
その次の日、又、霧がかゝりましたので、稜石どもは、又ベゴ石をからかひはじめました。実は、たゞからかったつもりだっただけです。
「ベゴさん。おれたちは、みんな、稜がしっかりしてゐるのに、お前さんばかり、なぜそんなにくるくるしてるだらうね。一緒に噴火のとき、落ちて来たのにね。」
「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまはったか

らね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼって、一寸とまった時も、それから落ちて来るときも、いつも、じっとしてゐたのに、お前さんだけは、なぜそんなに、くるくるまはったらうね。」

その癖、こいつらは、噴火で砕けて、まっくろな煙と一緒に、空へのぼった時は、みんな気絶してゐたのです。

「さあ、僕は一向まはらうとも思はなかったが、ひとりでからだがまはって仕方なかったよ。」

「ははあ、何かこはいことがあると、ひとりでからだがふるへるからね。お前さんも、ことによったら、臆病のためかも知れないよ。」

「さうだ。臆病のためだったかも知れないね。じっさい、あの時の、音や光は大へんだったからね。」

「さうだらう。やっぱり、臆病のためだらう。ハッハハハハッハ、ハハハハハ。」

稜のある石は、一しょに大声でわらひました。その時、霧がはれましたので、角のある石は、空を向いて、てんでに勝手なことを考へはじめました。

ベゴ石も、だまって、柏の葉のひらめきをながめました。

それから何べんも、雪がふったり、草が生えたりしました。かしはは、何べんも古い葉を落して、新らしい葉をつけました。

ある日、かしはが云ひました。
「ベゴさん。僕とあなたが、お隣りになってから、もうずゐぶん久しいもんですね。」
「えゝ。さうです。あなたは、ずゐぶん大きくなりましたね。」
「いゝえ。しかし僕なんか、前はまるで小さくて、あなたのことを、黒い途方もない山だと思ってゐたんです。」
「はあ、さうでせうね。今はあなたは、もう僕の五倍もせいが高いでせう。」
「さう云へばまあさうですね。」
かしはは、すっかり、うぬぼれて、枝をピクピクさせました。
はじめは仲間の石どもだけでしたがあんまりベゴ石が気がいゝのでだんだんみんな馬鹿にし出しました。をみなへしが、斯う云ひました。
「ベゴさん。僕は、たうとう、黄金のかんむりをかぶりましたよ。」
「おめでたう。をみなへしさん。」
「あなたは、いつ、かぶるのですか。」
「さあ、まあ私はかぶりませんね。」
「さうですか。お気の毒ですね。しかし。いや。はてな。あなたも、もうかんむりをかぶってるではありませんか。」
をみなへしは、ベゴ石の上に、このごろ生えた小さな苔を見て、云ひました。

ベゴ石は笑って、
「いやこれは苔ですよ。」
「さうですか。あんまり見ばえがしませんね。」
それから十日ばかりたちました。をみなへしはびっくりしたやうに叫びました。
「ベゴさん。たうとう、あなたも、かんむりをかぶりましたよ。つまり、あなたの上の苔がみな赤づきんをかぶりました。おめでたう。」
ベゴ石は、にが笑ひをしながら、なにげなく云ひました。
「ありがたう。しかしその赤頭巾(あかづきん)は、苔のかんむりでせう。私のではありません。私の冠は、今に野原いちめん、銀色にやって来ます。」
このことばが、もうをみなへしのきもを、つぶしてしまひました。
「それは雪でせう。大へんだ。大へんだ。」
ベゴ石も気がついて、おどろいてをみなへしをなぐさめました。
「をみなへしさん。ごめんなさい。雪が来て、あなたはいやでせうが、毎年のことで仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きっとすぐ又いらっしゃい。」
をみなへしは、もう、へんじをしませんでした。又その次の日のことでした。蚊が一疋(ぴき)くうんくうんとうなってやって来ました。
「どうも、この野原には、むだなものが沢山あっていかんな。たとへば、このベゴ石のやうな

ものだ。ベゴ石のごときは、何のやくにもたゝない。むぐらのやうにつちをほって、空気をしんせんにするといふこともしない。草っぱのやうに露をきらめかして、われわれの目の病をなほすといふこともない。くううん。くううん。」と云ひながら、又向ふへ飛んで行きました。

ベゴ石の上の苔は、前からいろいろ悪口を聞いてゐましたが、ことに、今の蚊の悪口を聞いて、いよいよベゴ石を、馬鹿にしはじめました。

そして、赤い小さな頭巾をかぶったまゝ、踊りはじめました。

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、
黒助どんどん、
あめがふっても黒助、どんどん、
日が照っても、黒助どんどん。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、
黒助どんどん、
千年たっても、黒助どんどん、
万年たっても、黒助どんどん。」

ベゴ石は笑ひながら、

「うまいよ。なかなかうまいよ。しかしその歌は、僕はかまはないけれど、お前たちには、よ

くないことになるかも知れないよ。僕が一つ作ってやらう。これからは、そっちをおやり。ね、そら、

お空。お空。お空のちゝは、
つめたい雨の　ザァザザザ、
かしはのしづくトンテントン、
まっしろきりのポッシャントン。
お空。お空。お空のひかり、
おてんとさまは、カンカンカン、
月のあかりは、ツンツンツン、
ほしのひかりの、ピッカリコ。」

「そんなものだめだ。面白くもなんともないや。」

「さうか。僕は、こんなこと、まづいからね。」

ベゴ石は、しづかに口をつぐみました。

そこで、野原中のものは、みんな口をそろへて、ベゴ石をあざけりました。

「なんだ。あんな、ちっぽけな赤頭巾に、ベゴ石め、へこまされてるんだ。もうおいらは、あいつとは絶交だ。みっともない。黒助め。黒助、どんどん。ベゴどんどん。」

その時、向ふから、眼がねをかけた、せいの高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピ

カする器械をもって、野原をよこぎって来ました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云ひました。

「あ、あった、あった。すてきだ。実にいゝ標本だね。火山弾の典型だ。こんなととのったのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしてることね。もうこれ丈けでも今度の旅行は沢山だよ。」

「うん。実によくととのってるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだってないぜ。」

みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまはってさすったりなでたりしました。

「どこの標本でも、この帯の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやった時の工合が、実によくわかるぢやないか。すてき、すてき。今日すぐ持って行かう。」

みんなは、又、向ふの方へ行きました。稜のある石は、だまってため息ばかりついてゐます。そして気のいゝ火山弾は、だまってわらって居りました。

ひるすぎ、野原の向ふから、又キラキラめがねや器械が光って、さっきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやって参りました。

そして、柏の木の下にとまりました。

「さあ、大切な標本だから、こはさないやうにして呉れ給へ。よく包んで呉れ給へ。苔なんかむしってしまはう。」

苔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁や、むしろに包

まれながら、云ひました。

「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたって下さい。私の行くところは、こゝのやうに明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん。」

「東京帝国大学校地質学教室行、」と書いた大きな札がつけられました。

そして、みんなは、「よいしょ。よいしょ。」と云ひながら包みを、荷馬車へのせました。

「さあ、よし、行かう。」

馬はプルルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向ふの野原の方へ、歩き出しました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第八巻」筑摩書房
　1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行
　1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行
入力：林　幸雄
校正：久保格
2002年11月10日作成
2008年3月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

気のいい火山弾

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/